

岡山市教育委員会事務局指導課との協働事業（平成 27・28 年度）
倉敷市教育委員会人権教育推進室への協力（平成 28 年度）
を通して考える「教育現場との協働」

2017年5月
プラウド岡山

はじめに

プラウド岡山は、性的マイノリティ当事者が安心して過ごせる居場所をつくることを目的に設立した当事者団体である。2014年1月に発足し、主に当事者を対象として隔月1回開催の交流会やその他のイベントを行ってきた。県内外から当事者やその家族、支援者など毎回25～30名が集まる。メーリングリスト登録者は約100名、交流会への参加総数は3年間で延べ400名を超えた。

交流会後のアンケートには「ありのままの自分で過ごせた」「人にこんな話をしたのは初めて」「自分以外の性的マイノリティに初めて会った」「自分ひとりではないと思えて少し楽になった」「いろいろな生き方をしている人の話が聞けて参考になった」などの感想が寄せられている。ほとんどの参加者はシスジェンダー・ヘテロセクシュアルを装って社会生活を営んでおり、プラウド岡山はセクシュアリティにとらわれず過せる貴重な場として定着しつつある。

平成27・28年度、プラウド岡山は岡山市教育委員会事務局指導課との協働事業を行った。これらの事業を始めるきっかけとなったのは、交流会参加者の切実な思いである。教師に理解されなかった悔しさ、自傷行為経験、学校不適應感、希死念慮、そして「学校生活は暗黒だった。記憶から消してしまいたい」という呟き。これをプラウド岡山内で共有するだけに終わらせないために、平成27年度「主に岡山県内の性的マイノリティを対象とした学校生活に関するアンケート調査」（以下、「アンケート調査」）を実施した。

さらに、平成28年度倉敷市教育委員会人権教育課題研究に協力する機会も得て、多くの教職員と接することになった。「子どもたちのために」という共通の思いをもち、異なる立場からアプローチする人たちと意見を交換することで、プラウド岡山としての立ち位置を明確にすることができたように思う。当事者団体として教育現場とどのように協働していくか、プラウド岡山の姿勢を述べたい。

I. 岡山市教育委員会事務局指導課との協働事業の概要

- (1) 平成 27 年度岡山市市民協働推進ニーズ調査事業
- (2) 平成 28 年度岡山市市民協働推進モデル事業

II. 教職員に伝えたいこと

- (1) 「まず先生が正しく知ってください」という回答の多さ
- (2) 教職員はどの程度理解しているか
- (3) 「当事者を見つけて支える」のではない
- (4) 個別対応は慎重に
- (5) 性的マイノリティではない児童生徒のためにも
- (6) 安心して過ごせる環境づくりを

III. 教育現場とどう関わっていくか

- (1) 「性的マイノリティ」が授業で扱われることへの不安
- (2) 教育は教育のプロに任せる
- (3) 倉敷市教育委員会人権教育課題研究への協力
 - ① 思いを伝える
 - ② 授業参加
 - ③ 成果
- (4) プラウド岡山としての課題

I. 岡山市教育委員会事務局指導課との協働事業の概要

1. 平成 27 年度岡山市市民協働推進ニーズ調査事業

平成 27 年 12 月 20 日から平成 28 年 1 月 31 日にかけて実施したアンケート調査は、当事者の声を教育現場へ届けることを目的とした。統計の数字ではなく、個々のエピソードや心情を本人の言葉のまま伝えることで当事者の姿を実体のある児童生徒像として教職員に思い描いてもらいたいと考え、回答には自由記述を多く採用した。

このアンケート調査で得られた回答は報告書として冊子にまとめ、岡山県内の全小中高支援学校へ送付している。しかし、年度変わりの繁忙期に各学校に届いたため、十分に活用されるには至らなかった学校もある。多忙を極める教職員への啓発は、時期や方法を工夫する必要があることを反省した。

報告書を読んだ教育関係者や行政職員からは、重要な人権課題であり次年度以降に何らかの取り組みを始めたいという感想が届いた。後述する倉敷市教育委員会人権教育推進室からの依頼も、この報告書がきっかけとなった。なお、報告書はプラウド岡山のホームページでも公開している。

このアンケート調査については「学校生活に関する調査であるのに、現在学校に通っている児童生徒の回答がほとんどない」という意見を教育関係者からいただいた。しかしこれは、自身のセクシュアリティを受容する段階に至る以前の児童生徒にこのようなアンケートを実施することへの危険性に思いが及んでいない意見である。このような意見が寄せられる現状であるからこそ、教育現場への啓発は重要であるという感を強くした。

2. 平成 28 年度岡山市市民協働推進モデル事業

平成 27 年度のアンケート結果をふまえ、28 年度のモデル事業では研修を取り入れたいと考えたが、教育委員会主催の研修（参加必須のもの）は前年度の早い時期にすでに予定が組まれており、研修内容として組み込んでもらうことはできなかった。

そこで、平成 28 年度は教職員用のパンフレットを作成し、岡山県内の全小中高支援学校へ配布した。内容は「当事者児童生徒の思い」「多様な性を知る」「こんな先生がいてくれたら」の三つの柱に絞り、具体的な対応策（マニュアル）は記載しなかった。マニュアルが存在すると、どうしてもそれに頼りがちになる。そうではなく、対応が必要かどうかも含めて子ども本人と話し合い、その中から最善の方法を探してほしいと私たちは考えている。

パンフレットは全教職員の手元に配布したいところではあったが、予算等の関係で各校 5 部とした。なお、岡山市は市教育委員会事務局指導課がパンフレットを増刷し全教職員に配布している。

また、28 年度モデル事業として女性が輝くまちづくり推進課や人権推進課ともいくつかの事業を行ったが、ここでの紹介は省略する。

II. 教職員に伝えたいこと

(1) 「まず先生が正しく知ってください」という回答の多さ

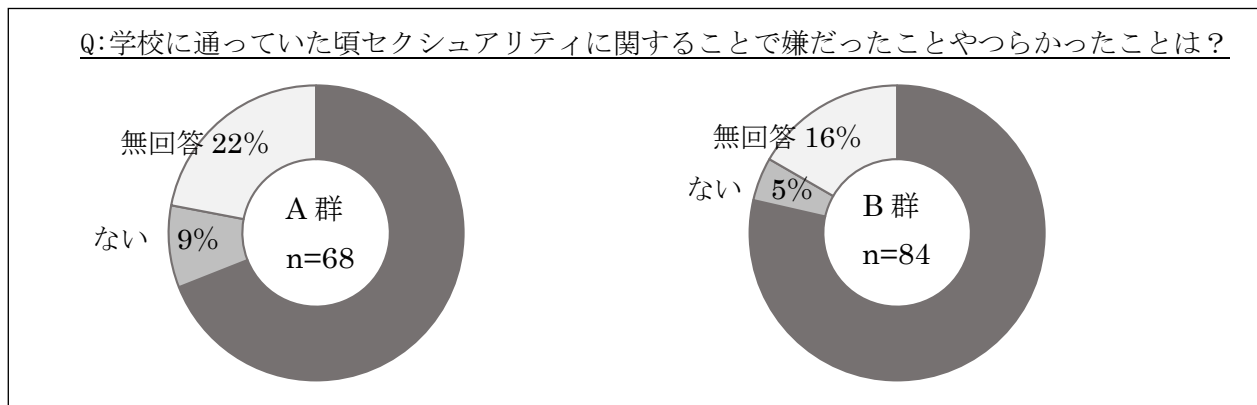
アンケート回答者の多くは、学校生活の中で経験した様々な苦しさや悩み（制服やトイレなど具体的な支障、自分のセクシュアリティを隠し嘘をつき続けること、性的マイノリティに対する差別発言を聞くこと、またそれに同調せざるを得ないこと、自分のセクシュアリティを受け入れられず自己否定に至ること、等々）を生む原因として周囲の無理解や誤解・偏見を挙げており、それらを解消するためにまず教職員に正しく知ってほしいと訴えている。

教職員の理解不足は、児童生徒に対して悪影響を及ぼす。

まず、当事者は学校生活を送る中で引き受けさせられる悩みや支障を教師に相談できないこと、あるいは相談することでさらに傷つくことがある。

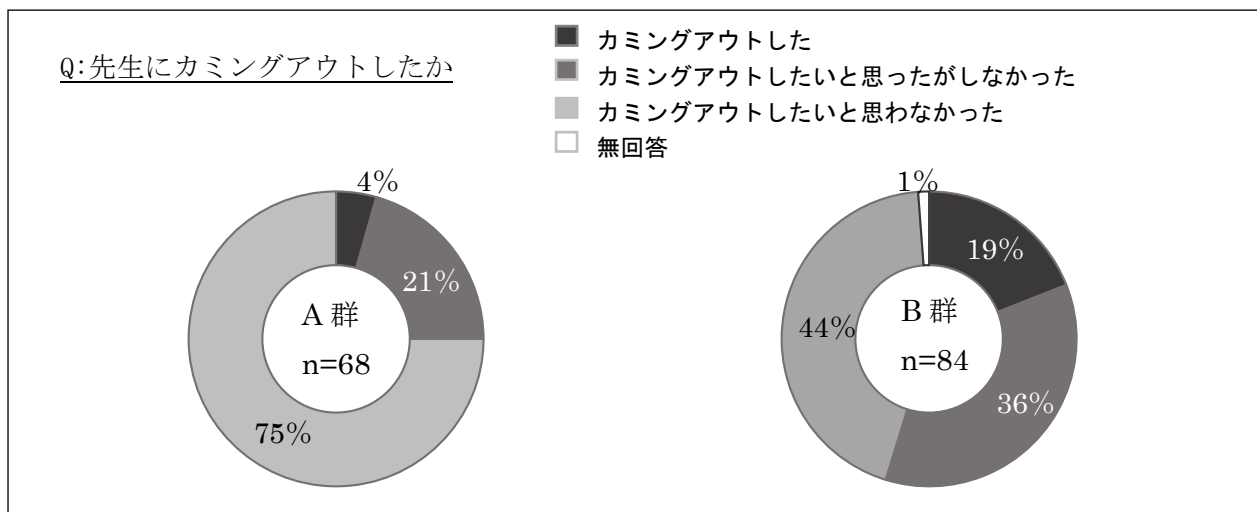
アンケート回答者の多くは、つらいことや嫌なことがあっても教師には相談していない。「学校に通っていた頃セクシュアリティに関することで嫌だったことやつらかったこと」を具体的に記述した回答者は、L、G、B、A など性的指向に関するマイノリティ（以下、A 群）のうち 69%、トランスジェンダー（X ジェンダーを含む、以下 B 群）のうち 79%であった（資料 1）。

【資料 1】



しかし、実際に教師にカミングアウトしたのは A 群で 4%、B 群で 19%に過ぎない（資料 2）。

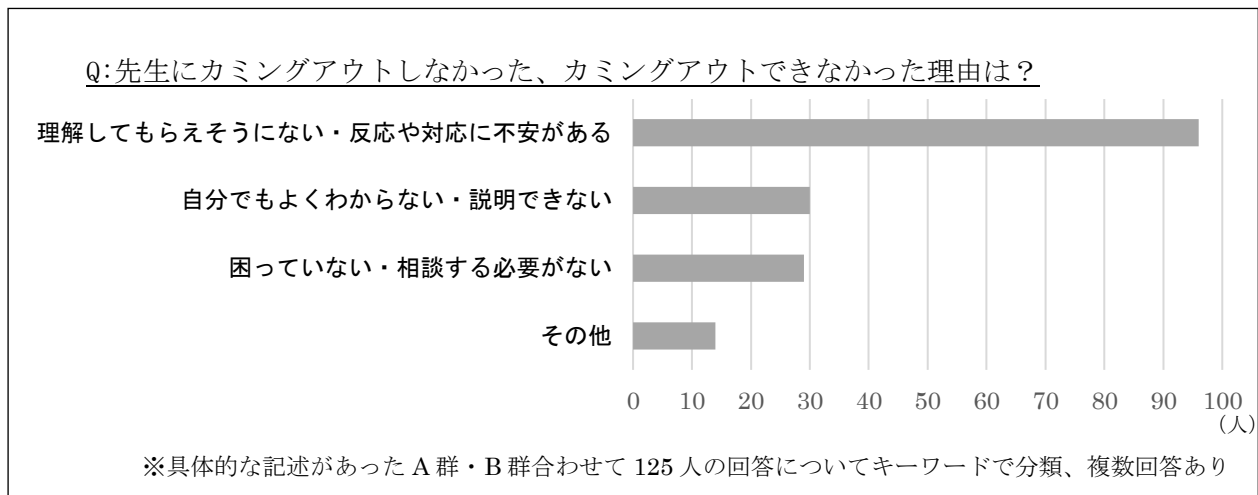
【資料 2】



※アンケート回答者のセクシュアリティは B 群が A 群を上回り、実際の比率と比べると偏りがあると思われる。回答者の年齢層も 10 代から 60 代まで幅広く現在の学校の様子とは異なる部分もあり得る。また、回答件数は 152 で統計のサンプル数としては少なく、自由記述回答を多く用いたこともあり、この調査結果は統計には適さないが、回答者のおおまかな傾向をみるための参考として割合を示す。

教師にカミングアウトしなかった、あるいはカミングアウトしなかった理由を尋ねたものが資料 3 である。「理解してもらえそうにない」「反応や対応に不安がある」など、教師への信頼感に関わる回答が最も多い。

【資料 3】



資料 2 で「カミングアウトした」と答えた回答者について、その結果を尋ねたところ、「理解が得られた」「相談にのってくれた」など望ましい結果が得られたという回答が特に B 群のトランスジェンダー 10 代～20 代に多かった。性同一性障害に関しては理解が進みつつある様子がみえる。

一方で、教師の理解を得られず「スカートが嫌だというのは我儘」(X ジェンダー 10 代前半)「気の迷い」「やめておきなさい」(X ジェンダー 30 代)などの言葉を受けたという回答もある。また、プラウド岡山交流会に参加したある生徒(トランスジェンダー 10 代前半)は教師から「思春期にはよくあること、そのうち治る」「スカート着用はあなた自身のため」と説得されていた。10 代半ばの当事者にとって教師によるこういった助言は重い。その後の進路選択をも左右する。

教師にカミングアウトしていなくても、教師の理解不足に苦しんだ経験を語る当事者は少なくない。特に多い例は教師による「ホモネタ」である。「同性愛は異常」と教えられて成人後も忘れることのできない傷として残っているという声もある。また、「教師が考える“男らしさ・女らしさ”を強く求められた」「将来は結婚するという前提を押し付けられた」という回答も多い。

このような教師の言動を、すべての児童生徒は観察し学習している。当事者であるなしに関わらず、教師の誤解や偏見は、それが「正しいこと」として子どもたちに刷り込まれ、再生産されていく。当事者の自己否定のもとにもなると考えられる。

(2) 教職員はどの程度理解しているか

「性の多様性」「性的マイノリティ」に関する教職員の理解の実態はどのようなのだろうか。

プラウド岡山は、平成 28 年度に 7 つの学校区（学校単独、あるいは中学校区の保幼小中合同）で教職員研修の講師を務めた。その際、先生たちが「何がわかって何がわからないのか」を知るため、研修後に簡単なアンケートを実施し 169 名の教職員の回答を得た。

「性的マイノリティについて研修前から知っていたか」という質問に対し「よく知っていた」と回答した教職員は 4 %、「初めて聞いた」と回答した教職員は 3 %であった。残りの 93%は「聞いたことはあるが詳しくは知らない」状態である。

この研修を受けるまで知らなかったことを自由に記述する欄には「性が多様であること」という回答が 58 件あった。性的マイノリティについて知らないことや誤解があったという内容の回答は 117 件、最も多く挙げられているのは「13 人に 1 人という割合（41 件）」である。「どのクラスにも当事者児童生徒がいて当たり前」ということに非常に驚く教職員が多い。

「性的マイノリティとは性同一性障害のことである、あるいは性同一性障害の人は同性愛である（37 件）」という誤解も多い。最近よく耳にする「性的マイノリティ（LGBT）」「性同一性障害」「同性愛」という言葉は同じ一人の人物の属性であるという誤った理解であろう。

※これらは研修後の短い時間に思いつくまま記述してもらったため、最も驚きをもって受け止めたことのみ記述した可能性がある。選択肢式であればそれぞれの回答数は更に増える可能性もあり、今後は選択肢式のアンケートを実施予定。

（3）「当事者を見つけて支える」のではない

性的マイノリティの児童生徒がどのクラスにもいるであろうということ、彼らは様々な苦しみを一人で抱え込んでいるかもしれないということを伝えると、ほとんどの教職員は大きな衝撃を受ける。そして、「教師に何ができるのか」と問いかけてくる。この問いは、よく聞いてみると「当事者の児童生徒をどう支援すればよいのか」を意味することが多い。「個別にどのような対応をすればよいか」を考えていくと、当然「当事者の児童生徒をどう見分ければよいのか」という疑問にぶつかる。

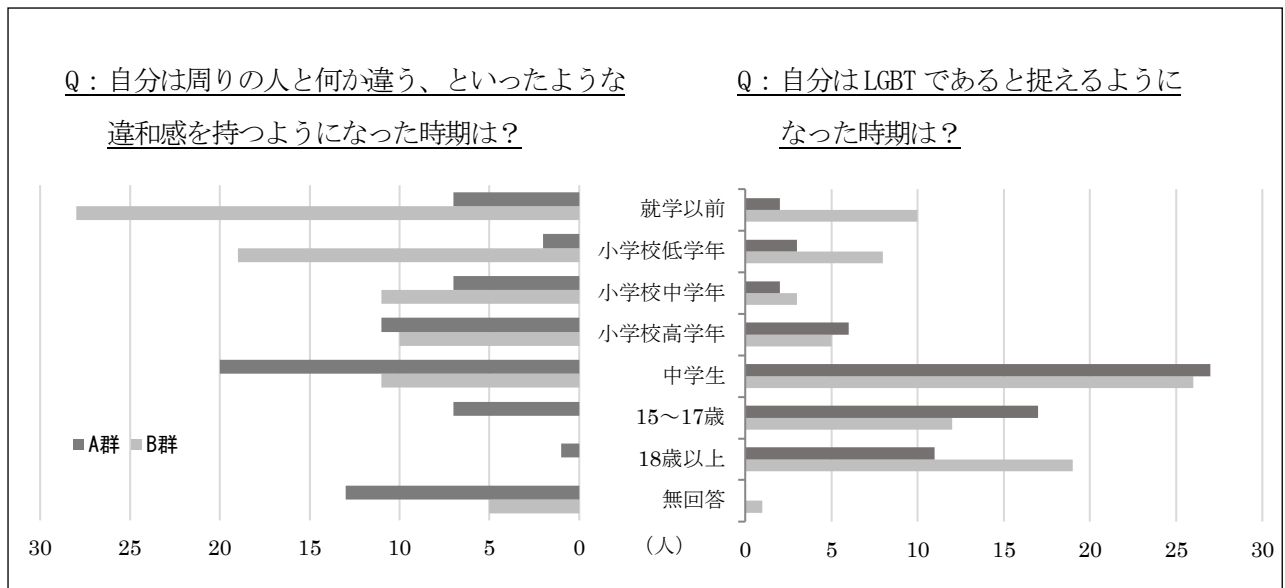
しかし、資料 2～3 でみたとおり、児童生徒は現状で教師にカミングアウトすることには否定的である。その理由として教師への信頼感のなさが最も多く挙げられたことはすでに述べた。

理解不足とともに、教師の反応や対応を不安に感じる回答もある。「特別扱いされたくない」「腫れ物扱いされたくない」などで、それまでの関係性に変化が生じることや、セクシュアリティのフィルターがかかってしまうことを当事者児童生徒は怖れている。これに関しては先に述べた教職員アンケートの中に、教師側からも「性的マイノリティはよくわからず、わからないことで気を遣ってしまう」「どう接すればよいかわからない」という悩みが出されており、当事者児童生徒はそれを敏感に感じ取っているといえる。

「自分でも自分のことがよくわからなかった」「性的マイノリティに関する知識や言葉を知らないで説明できない状態だった」などの回答は、セクシュアリティが本人の自覚による（他者が判断するものではない）ことや、正しい情報が不足していることに由来すると考えられる。何らかの違和感をもったり周囲との違いに気づいたりするのは B 群のほうが早く、就学以前という回

答が最も多い。A 群は小学校高学年から中学校にかけての時期が多くなる。しかし、それを性自認あるいは性的指向という概念で捉えられるまで（言葉や情報を得るまで）にはどちらのグループも数年かかることが多い。

【資料4】



概念や言葉を得ても、性的マイノリティ嫌悪が内在化している場合は、セクシュアリティを自分のこととして引き受けられない葛藤を抱える。「誰にも言うてはいけないことだ」という確信のようなものがあつた」「絶対に誰にも知られたくなかつた」などの回答からは、少数派であることをマイナス要素として捉え、固く口を閉ざす児童生徒の姿が見える。

「困っていない」「自分への個別対応は必要ないので相談する必然性がない」という回答もある。これらはA群に多い意見で、同じくA群には「性的マイノリティの存在が表面化することで、かえって差別やいじめを生むのではないかと危惧する回答もあつた。

様々な理由から自分のセクシュアリティを秘匿したい、話せないと思っている児童生徒は圧倒的に多い。表面上であれ穏やかな生活や良好な人間関係を壊したくないと願う気持ちは尊重されるべきである。

性的マイノリティの児童生徒が身近にいるかもしれないということを知ったとき、先生方の意識は自分のクラス・学年・学校にも当事者がいるのか、それは誰なのか、という方向に傾くことがある。「困りごとを抱えているなら、なんとかしてあげたい」という気持ちが先に立つのかもしれない。しかし、先生が当事者をわざわざ探し出すことを当事者の多くは望んでいないし、自分自身がまだ霧の中にいるような状態の子どももたくさんいる。教師側からの詮索や決めつけを生まないよう、教師への研修・講義では注意が必要である。

(4) 個別対応は慎重に

教師に相談したことですべてが解決するわけではないという現状もある。たとえば戸籍女性のトランスジェンダーの制服に関する対応例としては、「ジャージ（体操服）での登校を許可する」

「校内のみジャージを許可する」「スカートの下にジャージの着用を許可する」「パンツスタイルの制服をつくる」などが考えられるが、そのどれを選んでも、自分一人がその服装では目立ってしまい、周囲の憶測を生んだり理由を詮索されたりすることは十分考えられる。

セクシュアリティを知られることは、現状ではからかいやいじめのもとになる危険がある。スカートをはくこともスカートをはかないことも選択できずに進退きわまった結果、不登校になることもある。戸籍女子が着用できるパンツスタイルの制服を新しくつくることで登校できるようになった児童生徒もいれば、つくったものの一度も使用されないままという学校もあるのが現実である。

また、個別対応の根拠を周囲の児童生徒に伝えるために、本人のセクシュアリティを全校児童に周知した事例もある。指導のしやすさを考えればこれが最も簡単な方法であろうが、カミングアウトは子どもたちがこれから生きていく人生全般に影響しかねない重大事である。本人の同意があったとしても、派生するかもしれない様々な影響を考えると現段階では好事例とは言い難い。個別対応をめぐる周囲への周知は、今後ますます課題となるであろう。

個別対応策は、根本的な解決にはならない。周囲の偏見・誤解の解消や、良好な関係性の構築がなされない限り当事者の苦しみは消えない。「目の前の子どもは何について苦しんでいるのか」「子どもの今とこれからを大切にするにはどうすればよいか」ということに思いが至らないままマニュアルに基づく個別対応策をとることは、大きなリスクを伴うといえる。

(5) 性的マイノリティではない児童生徒のためにも

当事者アンケートでは、親及び親族にカミングアウトしている回答者は全体の15%に過ぎない。これは児童生徒に限ったことではなく、交流会でもあらゆる年代の参加者により親へのカミングアウトに関わる悩みが語られている。

一方で、我が子からカミングアウトを受けた保護者もまた大きな悩みを抱える。プラウド岡山の交流会には保護者も数名参加しているが、性自認や性的指向に関する知識がほとんどない状態でカミングアウトを受け、受け止めきれないまま親も葛藤を抱えてしまった経験が語られる。相談する相手もなく親子で孤立し、親子間の関係が悪化した例もある。

児童生徒の中の誰かは、将来必ず性的マイノリティの子どもの親になる。その時にありのままの我が子を受け入れることができるかどうかは、性の多様性をきちんと知っているか否かにかかっている。

また、自らの中にある誤解や偏見を知らないままでは、身近な当事者を追い詰める言動にもつながる。加害者を生まないためにも、性は多様であって少数派も当然存在するという事実を知ることが重要である。

(6) 安心して過ごせる環境づくりを

以上の理由から、プラウド岡山としては「性の多様性を知ってください」「多様性を認め合う環境づくりを今すぐ始めてください」「相談されたら、当事者児童生徒の話をしっかり聴くことから

始めてください」という3点に重点を置いて先生方に伝えている。

「環境づくり」は特に重要であると私たちは考えている。「子どもたちの力になりたい、支えたい」という思いが強い先生ほど、「環境づくりを」とお願いすると腑に落ちない表情をされることがあるが、当事者を探すことにはあまり意味がない。当事者側に「治す」「努力する」「打ち明ける」義務は一切ない。多くの当事者児童生徒は先生からの直接支援を求めてもいない。

担任するクラスに性的マイノリティを侮蔑・嘲笑する雰囲気はないか。自分と異なる者をことさらに排除しようとする雰囲気はないか。それが苦しいと多くの当事者は感じている。

それが解消されなければ、相談を受けても個別対応は難しい。そもそも、そういう集団のあり方を容認する教師に、当事者の子どもたちは相談したいとは思わない。性的マイノリティの児童生徒が学校で直面する課題を少しでも解消するためには、多様性を認め合う環境づくりが何より大切であると私たちは考える。

具体的な方法としては、「ホモネタなど性的マイノリティを侮蔑するような言動を見逃さない」「過剰な男女区別を見なおす」「保健や家庭科の授業でひと言フォローする」「図書室などに性の多様性に関する書籍や絵本を配架する」「様々な教科の中で多様な性のあり方を知らせる教材を使用する」「性の多様性に関する授業をする」などを例として挙げ、学校や学級、児童生徒の実態、教師の得意分野などに応じて工夫してほしいと伝えている。

若い世代の当事者から、「いざというときに相談できそうな先生を見つけておいた」という経験談がよく聞かれる。環境づくりへの取り組みは今すぐ目に見える効果を期待できるものではないが、地道に取り組む教師の姿は当事者児童生徒の安心感にもつながると考える。

ただし、「性の多様性に関する授業をする」ことについては、慎重になってほしいとお願いしている。その理由も含め、教育現場との関わり方についてプラウド岡山の姿勢を次に述べたい。

III. 教育現場とどう関わっていくか

(1) 「性的マイノリティ」が授業で扱われることへの不安

アンケート調査では「これからの学校に望むこと」という質問を設けており、これに対する回答として「性が多様であることをみんなに教えてほしい」という意見が非常に多く寄せられた。確かに、周囲の誤解や偏見が当事者の生きづらさの原因であるのだから、それを取り除くためには正しい知識を広めるべきであろう。では、「教える」方法として「授業」は適しているのか。

プラウド岡山の参加者、特に若い世代から「授業では取り上げて欲しくない」という意見がよく聞かれる。「先生の理解が不十分なままでは、どう扱われるかわからない」「その場にいる当事者児童生徒は、自分のことが知られないかという恐怖に陥る」「当事者探しが始まる」などがその根拠である。自分のセクシュアリティを公にしたいくない当事者児童生徒の中には「LGBT」という言葉を誰かが発するだけで身構えてしまう子どももいる。そんな子どもたちをどう守るか。

理想は「すべての児童生徒への教育」でありながら、いま学校の中にいる当事者児童生徒の心情を思えば現状での授業や講演は難しく、プラウド岡山内部でも矛盾を抱えたままである。

(2) 教育は教育のプロに任せる

当事者（当事者団体）が教育現場と関わる時、その手法は二つある。一つは教職員への協力・啓発、もう一つは児童生徒への直接的な啓発である。プラウド岡山は教職員との協働・協力を基本とし、児童生徒対象の講演依頼は全てお断りしてきた。

授業者が誰であるかということ以前に、授業そのものへの拒否感があることは先に述べた。それ以外にも、当事者が授業をすることについて、私たちは別のリスクを感じている。

学校の外にいる私たちには、子どもたちの実態は見えない。対象の集団の中で同性愛や性同一性障害などの言葉が知られているのか、どのようなシーンでどのような意味合いで使われているのか、すでにセクシュアリティに関することでいじめやからかいを受けている子どもはいないのか。それらを把握せずに講義内容を組み立てることに、そもそも無理がある。

また、私たちは教育の手法を学んでいない。それぞれの発達段階の子どもたちに、どんな言葉を使ってどのように話しかけ、どこでどのくらい考えさせるか。全体の教育課程の中のどんな位置づけにあり、その時間で何をめざし、どんな変化をもって達成とみるか、ということもわからない。

与えられた時間は何事もなく過ぎても、その後の学校の中で何が起こるか予測できない。何か起こったとしても私たちにはフォローの手段がない。責任をとる方法もない。教師による前後のフォローがないままでは授業内容が活かされないばかりか、啓発効果よりも当事者児童生徒への影響が心配される。

学校側が組み立てた授業の流れの中の一局面に、当事者として登場するという方法もある。しかし、「性的マイノリティ」という不確かな枠組みのようなものを背負い、おそらく子どもたちにとって初めて接する「性的マイノリティ」として目の前に立つことの責任の重さもある。こういったさまざまなリスクを回避し責任を果たす力量を私たちは持ち合わせていないと判断して、プラウド岡山は児童生徒への直接的な啓発活動を避けてきた。

子どもたちにどう教えるかは、教育のプロに任せたい。性は多様であるということ、自分自身の中にある「男」「女」の決めつけ、性的マイノリティに対するぼんやりとした誤解、そういったものを他人事ではなく自分の中にもある課題としてすべての子どもたちに考えさせてほしい。今の時代でも、子どもたちにとって先生は「正しいことを教えてくれる身近なおとな」である。だからこそ、先生の言葉に大きな影響を受け、救われ、傷つくこともある。突然やってきた誰か知らない人の話で本当の意味での気づきが生まれるとは考えにくい。

「性の多様性」は当事者でなければ伝えられないというわけではない。知識がなくて教えられないというのであれば、まずは教師の理解を深めてほしい。そのための一つ的手段としてプラウド岡山を利用するのであれば、私たちにできる限りの協力をしていきたいというのがプラウド岡山の姿勢である。

(3) 倉敷市教育委員会人権教育課題研究への協力

① 思いを伝える

「性の多様性を認め合う児童生徒の育成」を研究主題として平成 28 年度の研究に取り組むこと

になった倉敷市教育委員会人権教育推進室から、プライド岡山に協力依頼があった。授業そのものは10人の課題研究委員（研究授業をする教師）がそれぞれの担任するクラスで行い、指導案作成や当日の授業には基本的に私たちは関与しない。それ以前の、授業の基盤となる部分—まず先生が多様な性を知り、性的マイノリティを知る—について主に協力することになった。

具体的には、課題研究委員対象の研修、委員が所属する学校やその周辺校での教職員研修やPTA研修、課題研究委員とプライド岡山会員との意見交換会開催等を行った。研修の内容はⅡで述べたとおりである。授業に関する相反する意見「性も多様であることをみんなに教えてほしい」「性の多様性（性的マイノリティ）を授業で扱わないでほしい」も、理由も含めてそのまま伝えた。さらに、以下の3点をお願いした。

- 唐突なやりっぱなし授業にならないようにしてほしい。
 - ・その教室にいる当事者児童生徒を不安にさせる。
 - ・「性的マイノリティとは」という新たな枠だけ教えて終わるのでは、新たな差別を生むことにつながりかねず、当事者探しを生む恐れもある。
- 「性の多様性を認め合う児童生徒の育成」という目的を見失うことのないようにしてほしい。
 - ・「性的マイノリティはかわいそう」「受け入れよう」「認めよう」「何をしてあげられるだろう」等の視点のまま授業が終わるのでは、すべての子どもたちが自分の課題、社会の課題として考えたことにならない。
- 校内のすべての教職員でフォローできる態勢をとってほしい。

② 授業参加

授業者の希望により5校の研究授業に参加した。そのうち3校は児童生徒のグループワークに入ってもらいたいという希望、他の2校はビデオレターと手紙という形での参加要請であった。

セクシュアリティを明かしたうえで子どもたちと直接話をするのは、どのような言葉を投げかけられるか、自分の名前がどこまで伝わっていくかなど、当事者側のリスクも大きい。今回は大学院生2名がそれを承知のうえで自ら名乗り出たため、その授業までに授業者による環境づくりができていることを条件に、院生に任せることにした。

参加授業は「性の多様性を認め合う児童生徒の育成」を主題とした単元のうち、最終段階に設定されていた。それまでに児童生徒は「ひとは多様であること」「性も多様であること」「性の多様さの中には少数派も存在し、性的マイノリティと呼ばれることもあること」など、4～6時間かけて丁寧に学習していた。しかし、それでも「テレビで見るセクマイタレントのような人が来る」と予想していた児童が数名おり、院生2人が全く「普通の」先輩であったことに驚きの声もあがったという。

これらの授業の最終目標は「自分らしく生きることの大切さ」を考えると置かれていた。グループワークは最初「性的マイノリティであることで困っていることは何か」という質問から始まったが、個々の児童生徒の悩みや夢に話題が移り、「それぞれが自分のこととして考える姿も見られて充実した時間になった」と院生は感想を述べている。

③成果

教育委員会がこの研究に取り組み、教師による研究授業が行われたことは、当事者グループとしては感慨深いものであった。最も心配された教室内の当事者児童生徒については授業者が注意深く教室内を見守っており、今のところ何も報告されていないようである。配慮の行き届いた授業を教師が責任をもって行うのであれば、授業という手段は有効かもしれない。

倉敷市教育委員会人権教育推進室は平成 28 年度の研究成果を冊子にまとめるとともに、ホームページ上でも公開した。単元構成や指導案、児童生徒の反応や成果、反省点等については、その冊子を参照していただきたい。また、平成 29 年度も引き続き同じテーマで研究を深めると聞いているので、その成果にも期待したい。

今回の授業は、低学年からの積み上げがない状態で、小学 1 年生から中学 3 年生までを対象に行われた。プラウド岡山に参加する 10 代の当事者たちからは「中学でいきなり性の話題を出されると教室内の雰囲気ざわつく」「まじめに聞かない生徒がでてくる」「もっと早くから始めておかないと、先生も生徒もしんどい」という声があった。実際、学年が上がるほど授業者は慎重にならざるを得ず悩みも大きかったようである。低学年から少しずつ無理なく学習していける「性の多様性教育プログラム」がほしい。倉敷市での取り組みを足掛かりとして、「教育とは何か」を知り尽くしている教育現場から生み出されることを期待する。

(4) プラウド岡山としての課題

倉敷市教育委員会の取り組みの中で、プラウド岡山は、先生方の理解を深めるという授業の基盤になる部分に協力した。伝える側としての未熟さを反省するとともに、与えられた時間の少なさに悩まされることが多かった。

研修のために設定できる時間はおおむね 90 分というところが多い。その 90 分で、多様な性、児童生徒の現状、先生方をお願いしたいこと等を伝えなければならない。性の多様性に関することだけでも初めて聞く人には難しいが、それを理解したことを前提に子どもの話をしなければならぬ。

子どもといっても、セクシュアリティ、年齢、環境、性格などは一人ひとり様々だ。もやもやしていたり、気にしていなかったり、理由のわからないイライラをため込んでいたり、躊躇なく表現していたりする。その表現が例えば「スカートが嫌」というひと言であっても、その背景にあるものは一人ひとり違う。どういう言葉に乗せて自分を表すかは本人の成長を待つしかない。先生には、セクシュアリティに関する知識を身につけてもらったうえで、決めつけずに見守ってほしい。その辺りをじっくり説明するだけでも時間がかかる。

MtF と FtM は非対称であってジェンダー格差が関わること、その両者とは概念的に異なる X ジェンダーと自認する子どももいるということを知らなければ制服の話などそもそもできないが、そこまで触れる時間もない。

研修が終わるたびに内容を見直し、少しでも実際の当事者像に近いものを感じ取ってもらえるよう努力したつもりではあるが、それができたと言い切る自信はない。わずか 90 分の研修で「これで何もかも理解できた」と思われてしまっても困る。研修後さらに理解を深められるよう参考

図書などを紹介したが、多忙な先生方には無理な話かもしれない。せめて授業者の先生には多くの当事者たちと交流してほしいと考えたが、それも時間的に難しかった。

「性の多様性」を子どもたちに伝えようと動き始めた教育現場に対し、当事者グループとしてのプラウド岡山が協力できることは、当事者のさまざまな思いを伝えることである。授業は教育のプロである先生方に任せ、その基盤をしっかりとしたものにするために、今学校で過ごしている子どもたちのために、研修で何を伝えるかを当事者側として責任をもって考えていきたい。

おわりに

性の多様性を広く伝える役割を教育現場だけに押し付けてはいけないことはもちろんである。家庭や社会に向けての啓発活動も、岡山の地で地道に続けていきたい。